

8806 酔うと本音を吐く人がいる。

酔うと本音を吐く人がいる。そうでない人もあるが、大抵は酔って出る性質が、その人の真実の性質で、酒で本性をあらわす人は、どちらかと言えば好人物だという。以前私はごく売れない漸家を知っていた。常に内気な従順な老人で、自分の売れないのは当たり前のことだと言っていたが、或る時したたかに酔って「おれの芸のわからない世間の奴らはバカヤロウだ」と怒鳴りたてた。おそらく、これが彼の本音なのであろう。

宇野信夫『うつくしい言葉』

[許容訳例]

There are people who reveal their selves when they get drunk. Though it is not always so, generally the character which is disclosed when people get drunk is their real nature, and people who show their true selves in this way are considered on the whole to be good and honest people. I used to be acquainted with a particularly unsuccessful professional comic story-teller. A normally shy and gentle old man, he was always saying that it was quite natural that his stories didn't catch the public fancy. Once, though, when he was very drunk, he said angrily, "The public are very foolish not to appreciate my stories." This is probably what he really felt.

[翻訳例]

There are some people who reveal their true feelings when they get drunk. There are exceptions, of course, but generally the nature revealed when a person who lets it come out under the influence is considered to be, on the whole, a decent person. I used to know a professional raconteur who was notably unsuccessful in his profession. A normally shy, meek old man, he always said it was only natural that he shouldn't be popular. On one occasion, though, when he was heavily drunk, he started shouting that the public was an idiot not to appreciate his art. That, I imagine, represented his true feelings.

■酔うと本音を吐く人がいる。(8806)

★ 「酔う」は「酔っ払う」で get drunk です。

● [と] (瞬時同時)

「酔う [と]」の [と] は「瞬時同時」ですから when でいいと思います。なお、「酔うとすぐ」の感じなら as soon as を使うことも出来ます。

★ 「本音を吐く」は、最も一般的な言い方としては reveal one's true feelings です。reveal one's true self も使えます。同じことは say what one really thinks でも表すことが出来ます。アメリカ系の辞書では express oneself とか express one's real feelings が多いようです。なお, give oneself away は「ぼろが出る；しっぽを出す；ばれてしまう」という悪い意味で使

うことが多いので、ここでは好ましくありません。

★「…人がいる」は There are (some) people…が一番いいです。もちろん、Some people…も使えます。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言」(酔うと本音を吐く人)

「本音を吐く人」は「連体修飾節（本音を吐く）+不定代名詞的体言（人）」ですから、英語では「名詞((some) people)+関係詞節(who reveal their true feelings)」です。

■ そうでない人もあるが、大抵は酔って出る性質が、その人の真実の性質で、酒で本性をあらわす人は、どちらかと言えば好人物だという。(8806)

★「そうでない人もあるが」は「人もいるが」ではないので、「そうでない場合もあるが」と考えるべきだでしょう。There are exceptions, of course, …とか Though it is not always so,,,くらいです。

★「大抵は」は generally; normally; mostly; usually; generally speaking などが使えます。

★「性質」は character とか nature のほかに disposition も使えます。この三つの使い方はちょっと難しいのですが、まず nature が一番基本的で、たとえば、優しいというような生まれつきの性質を表す言葉です。disposition はほとんど nature と同じと言っていいのですが、特に人と付き合う場合の、たとえば、優しい、短気な、従順なというような性質を表します。この二つに比べると character はある程度教育とか育ちによって形成されたもの、つまり道徳的な要素が入ってくると思います。たとえば、小さな子供の場合、This child has a very nice nature.と This child has a very nice disposition, はほとんど同じですが、ここで character を使う場合には、nice ではなく good になります。言い換えれば、character はある程度人格形成が進んでいないと使えないということです。ただ、実際には、どれを使ってもいい場合が多いと思います。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言」(酔って出る性質)

「酔って出る性質」は「酔っ払った時にでる性質」と考えて処理します。これは「連体修飾節（酔っ払った時にでる）+不定代名詞的体言（性質）」ですから英語では「名詞(the character)+関係詞節(which is disclosed when one gets drunk)」とか「名詞(the nature)+関係詞節((which is) revealed when one is intoxicated)」とかでしょう。

★「その人の真実の性質」は one's real [true] nature で、nature の代わりに character もいいです。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言」(酒で本性をあらわす人)

「酒で本性をあらわす人」は「酔っ（払っ）て本性をあらわす人」ですし、「本性」は「真実の性質」ですから it で受けて「名詞(the person)+関係詞節(who lets it come out under the influence)」としてもよいし、また、「名詞(people)+関係詞節(who show [reveal] their true selves [nature] (immediately) when they get drunk [in this way])とか、さまざまな書き方が可能です。なお、under the influence は「酒に酔って」の常套表現です。

★「どちらかと言えば」は、ここでは「一般的な傾向としては～が多いようだ」ということ

ですから tend to be…を使ってもいいと思います。あるいは on the whole というフレーズを使ってもいいです。ただ、if anything は「どちらかと言えば」の訳として使える場合も多いのですが、「強いていえば」の要素が入りますから、ここでは使えません。

★「好人物」の「好」は good とか good and honest とか decent などの形容詞であらわすことが出来ます。

★「・・・だという」は be said to be…とか be considered to be…とすればいいでしょう。

■以前私はごく卖れない嘸家を知っていた。(8806)

★「以前・・・た」は、この場合 used to…が一番いいと思います。

★「私は～を知っていた」は I used to know [be acquainted with] ~でいいでしょう。

★「ごく卖れない～」は a very unsuccessful ~でいいですが、very ではちょっと弱い感じがしますから a [particularly; notably] unsuccessful ~とするとちょっとユーモラスな感じも入っていいのではないかと思います。なお、unpopular は「人気がない」という意味だけではなく、場合によっては何か具体的な理由があって「嫌われている」という意味にもなり、たとえば、He is very unpopular at school. というと、むしろ「嫌われ者」という感じになりますから、ここでは使わない方がいいでしょう。

★「嘸家」は professional comic story-teller [professional raconteur] ぐらいでしょう。

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(ごく卖れない嘸家)

「ごく卖れない嘸家」は上のように形容詞で処理できますが、「連体修飾節(ごく卖れない) + 体言(嘸家)」として、上の形容詞部分を後にまわして「名詞(a professional comic story-teller) + 関係詞節(who was notably unsuccessful in his profession)」のようにもいいでしょう。

■常に内気な従順な老人で、自分の卖れないのは当たり前のことだと言っていたが、或る時したたかに酔って「おれの芸のわからない世間の奴らはバカヤロウだ」と怒鳴りたてた。(8806)

★「常に」は、後の「したたかに酔って」と考え方合わせて「(そういうときを除けば) いつもは」と考えて normally がいいです。

★「内気な」は shy でしょう。辞書には reserved も出ていますが、これは「打ち解けない；よそよそしい」です。

★「従順な」は、ちょっと難しい。辞書には decent が出ていますが、これは「人の命令、言うことにすぐ従う」、つまり「服従する」ですから、ここでは使えません。submissive も submit(降伏する)という言葉からわかるように卑屈とまではいかなくとも何でも言われたとおりに従うと言うことですから「従順な」には強すぎます。gentle は「優しい」という意味が強いので、ここではちょっと合わないような気がします。meek は「優しくて謙虚で決して人に逆らわない」という感じですから、この「従順な」に合います。また docile も「おとなしく言われた通りに従う」ということですから使えます。もう一つ uncomplaining があります。これは「どんなことをされても言われても、よほどのことがない限りそのまま

[反対もしないで] 受け入れる」という感じなのでここに合うと思います。

★「老人」は old man です。

★「自分が売れない (のは)」は his stories didn't catch the public fancy とか、あるいは appreciate を使って people didn't appreciate him でもいいです。この appreciate は「鑑賞する」ではなく「真価がわかる(realize [understand] the true worth [meaning] of something)」という意味です。たとえば、I don't appreciate music.と言えば「音楽がわからない」という意味です。あるいは、簡単に…that he shouldn't be [wasn't be] popular としてもいいでしょう。なお、wasn't にすると、単に事実を述べる感じですが、shouldn't にすると、そういう一つの現象(の意味)をとらえて言う感じになります。

★「・・・は当たり前だ」は it was quite natural that…の他に、it was not surprising that…も使えます。it was only proper to…[that…] は、proper が社会のルールというか、社会的に見てというような要素が入ってきますからここでは使えないと思います。また、have good reason to…は、ここでは構文的に使いにくいです。

★「・・・と言っていた」は he was always saying…とか he always said…です。

● [が] (逆接)

「(・・・と言っていた) [が] (, 或る時・・・)」は but です。

★「ある時」は once ですが、意味が限られていてはっきりしている場合には on one occasion の方がいいかも知れません。

★「したたかに酔って」は when he was [got] heavily [very] drunk ぐらいでしょう。なお、dead drunk は「口がきけないくらい泥酔でいて」ですから、ここでは使えません。

★「おれの芸・・・」の箇所は引用符で囲ってありますから直接話法で訳してもいいですが、その場合は my art です。ただし、英語では地の文の中に直接話法を混ぜるのは好みませんから間接話法にするのが普通です。その場合は his art です。ここでは art を stories としてもいいでしょう。

★「わからない」は「「わからないとは」と考えて not to appreciate ~ とします。なお、appreciate の代わりに understand を使うのは、意味が広すぎて、たとえば、その話を聞いても言葉として理解できないというような場合も入りますから、使わない方がいいでしょう。

★「世間の奴ら」は the public でしょう。これは集合的にとらえた場合は单数ですが、構成員を念頭にした場合は複数です。他に people も使えます。また audiences も使えなくありません。

★「バカヤロウだ」は be very foolish; be an idiot など。ちょっと古い言い方ですが、an idiot の代わりに an ass を使ってもいいです。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言」(おれの芸のわからない世間の奴ら)

「おれの芸のわからない世間の奴ら (は・・・)」は、形態は「連体修飾節(おれの芸のわからない) + 不定代名詞的体言(世間の奴ら)」ですが、「名詞(the public) + 関係詞節(who

doesn't[didn't] appreciate his [my] art) is [are; was; were] …」とカテゴリー化するのではなく、日本語の真意は「おれの芸がわからないなんて、世間の奴らは・・・」という意味に感じられます、したがって、The public was [were; is; are] … not to appreciate his [my] art です。なお、連体修飾節が次に出てくる主観語と因果関係にある場合には、このように処理するのが適当と思われます。

★「・・・と怒鳴りたてた」は、簡単に said angrily でもよいですが、「怒鳴る」には大声でという意味も入りますから、ちょっと弱いですし、「怒鳴った」ではなく「怒鳴りたてた」ですから start shouting that…くらいでしょう。shout のかわりに yell も使うことが出来ます。

■おそらく、これが彼の本音なのであろう。(8806)

★「おそらく・・・だろう」は probably とか I imagine などです。might は「かもしれない」ですから弱いです。

★「これが・・・なのだろう」は This [That] is …でもいいですが、is ではあまりにもイクオールで結びすぎると感じるなら represent を使うといいでしよう。つまり、A is B という言い方では論理性がはっきりしすぎるという場合には A represents B を使うのです。「～を意味する」に近いと思います。

★「彼の本音」は what he really felt でもいいし、簡単に his true feelings でもいいです。